



例年6月下旬～7月上旬が見頃。朝咲きで午前中に散ってしまう、ほかなきも魅力

## 美しい花、種子の健康機能 —亜麻復活を地域づくりの核に

### 祭りにも2,600人が来場

北海道にとってプラスになる新規事業を打った。橋本眞一氏(元北海道技術コンサルタント代表取締役、元亜麻公社代表取締役)の発案で、私が亜麻事業を企画してから11年目を迎えます。国内の亜麻栽培には約40年以上のブランクがありましたが、①明治期から戦後まで道内で繊維用に大規模栽培されていた②乾燥した冷涼な気候を好む③栽培に大面積が必要—などから、北海道が最適であると判断し、事業を始めました。オメガ3という成分を豊富に含んだ亜麻仁油(種子の油)の機能性を特徴とした食品事業を主体に、薄紫色の花が広がる美しい景観もPRに利用しています。

現在、当別町を中心に約10haを契約栽培しています。フォトコンテストや当別で亜麻まつりを開催するなど、少しずつ認知度が高まっています。亜麻まつりは今年4回目を開催しました。廃校になった小学校を会場に、亜麻に関する資料館や町

元亜麻公社執行役員 内藤 大輔  
元北国生活社代表取締役

民の創作民話「亜麻の花咲く村」の原画展、亜麻に関する講演会、「亜麻色の髪の子乙女」歌唱コンクールなどの他、地場野菜や亜麻種子を使った亜麻そばの提供なども行っています。会場と最寄りの亜麻畑を結ぶバスを運行させ、亜麻の花が織りなす美しい景観も楽しんでもらっています。年々来場者は増え、今年は2,600人が来場しました。

### 農家との協力で栽培方法を模索

事業は100%民間主導ですが、当別町など自治体から、でき得る限りの協力をいただき感謝しています。「立ち上がる農山漁村」(農水省)や「美の里づくりコンクール」(農村開発企画委員会)での受賞も助みになっています。これまで、試行錯誤を繰り返してきました。ブランクのある亜麻栽培の復活と体系化が最も大きな課題でした。種が手に入らない、大麻と間違えられて通報されそうになる、栽培方法の資料が古い文献か英語のものしかない、などなど。実際の作業も作業機械を自作したり、無農薬栽培のために草取りや防除の体系を考えたり、契約農家に協力してもらいながら少しずつ課題を解決してきました。今後は、製造原価が北米産に比べて10倍以上高い中での販路拡大が至上命題です。地域づくりは長続きしなければ意味がありませんので、この事業に関わる全ての方が幸せになれるように今後も頑張っていきます。



「亜麻まつり」は毎年7月の第2日曜日に開催